

学会ハイライト

第33回日本皮膚病理組織学会年次学術大会 を終えて

(平成29年6月17(土), 18日(日)東京, 石垣記念ホール)

山元 修

鳥取大学医学部感覚運動医学講座皮膚病態学分野
日本皮膚病理組織学会理事長

はじめに

平成29年6月17～18日に、東京都港区の三会堂ビル内石垣記念ホールにて、第33回日本皮膚病理組織学会年次学術大会を主催いたしました(図1)。本学会は、「皮膚の病理組織同好会」を母体に昭和60年「日本皮膚病理組織研究会」(初代理事長：故池田重雄埼玉医科大学名誉教授)として発足し、平成元年から現在の名称となっています。池田先生のあと、小野友道熊本大学名誉教授、熊切正信

福井大学名誉教授が理事長を担われ、平成25年度より筆者が理事長に就任し現在に至っています。本学会では、田上八朗東北大学名誉教授、斎田俊明信州大学名誉教授などそうそうたる顔ぶれも活躍されてきました。年次学術大会は理事長が毎回会長となり、その所属施設が主催するという規定があり、私どもも今回で5回目の主催です。

さて、学術大会での発表形式は長らくスライドコンファレンス方式をとってまいりました。すなわち、出題者からの病理標本が演題提出施設すべ



図1 白熱した議論が戦わされている会場。

てに配布され、各施設であらかじめ検討してもらい当日の討論に臨むという形式です。毎回、白熱した論争が繰り広げられてまいりました。これに加え、第30回学術大会(平成26年)からは皮膚病理初心者のためのアドバイザーセッションと研究演題セッションを設けました。前者は、私の理事長としての唯一無二の目標が皮膚病理に興味のある若手医師育成であることから、若手が積極的に発表でき、ベテランから優しく懇切丁寧に指導を受けられる場として設けました。また後者は、スライドコンファレンスがある意味、症例報告にとどまるため、衰退しつつあった本邦皮膚病理の研究推進と若手の研究意欲促進のために設けました。また、本年度からダーモスコピーと病理組織の融合を試みたセッション、ならびに韓国皮膚病理学会との連携推進のためInternational Sessionという日韓の若手中心の英語発表の場も設けました。また、第29回大会(平成25年)からは、病理組織画像をバーチャルスライドデータで配信するシステムを確立し、これまで限られた範囲の会員のみ病理標本の事前観察が可能だったものが、会員全員があらかじめ閲覧できるようになっており、今回も討論内容がより濃いものになりました。さらに、従来学術大会の日程は1日のみでしたが、内容の充実と新セッションの登場、それに伴う演題数の増加により、学会史上初めて2日にわたり開催しました。

われわれの学会のユニークな点は平成27年から、全国から選りすぐりの、皮膚病理を専門にしたいという野望に燃える若者集団である「草志衆」を立ち上げたことです。これからの本邦の皮膚病理を担って立つこれらの人材に対し、日本皮膚病理組織学会は全面的にバックアップする体制を確立しつつあります。International Sessionをはじめ、多くの演題が草志衆のメンバーによって発表されました。

本学術大会は多数の一般病理医の参加もあるという珍しいもので、臨床医と病理医との橋渡しをしております。今回も多く多くの病理の先生にご参加いただき、2名の病理の教授(久岡正典先生、新井

栄一先生)には座長もお務めいただきました。

本学術大会のテーマ

毎年ほぼ同じ形式・内容で同一施設により学術大会が企画・運営されますので、毎回決まったテーマがあるわけではありませんが、私の理事長就任時からの目標が「皮膚病理を志す若手医師の発掘と育成」ですので、これに沿った学術大会の企画を行っております。

1. 一般演題(スライドコンファレンス形式)

一般演題は、口演22題、ポスター2題をいただきました。あらかじめ発表の全施設には配信されたバーチャル画像にもとづいた診断の投票をお願いしておりました。それらの集計結果が演題ごとに座長により披露されるたびに小さなため息や驚きの声が会場からあがります。フロアからは、鋭い質問や、演者の診断に対する賛否両論、さらには新知見の紹介など、真剣かつハイレベルの討論が展開されました。それぞれの領域のエキスパートが座長として、侃々諤々の論争もそうでない場合も上手に舵取りをされていました。かつては若者いじめとも取れるような極めて厳しい発言もあったようですが、会長として機会あるごとに、若者にはソフトに接してください、と促していることも功を奏し、若手演者に対してモチベーションの上がるようなアドバイスも相次ぎ、とても良い雰囲気でした。

さて、これらの討論内容は毎回記録集としてまとめられネット上で配信されますが、そのまとめ役を担うのが「草志衆」のメンバーです。

2. アドバイザリーセッション「皆で解決! あな たの疑問」

サブタイトルからおわかりのように、皮膚病理初心者が日頃疑問に思うことを、ポスターにて症例提示しながらベテランに教をを請う、という企画ですが、毎回好評を博しております(図2)。興味深い4題が出されました。同じような疑問をもっている参加者が多いためか、ポスター会場は人だかりで一杯でした。若手も、日頃からの疑問に対するベテラン会員からのアドバイスに十分納得し



図2 和気あいあいとしたアドバイザリーセッションでの1コマ。

ているようでした。

研究演題

今年はマダニ咬症と好塩基球，多発血管炎を伴う好酸球性肉芽腫，Merkel細胞癌についてのハイレベルな研究演題が出されました。理事長として私がもっとも期待し，発展して欲しいと願っているセッションです。というのは，診断病理のみではいずれ皮膚病理もじり貧になることが目に見えており，とくにAI(人工知能)が導入されるようになれば，完全にそれにとって代わられるからです。生き延びるためには，診断だけでなく，病態生理に迫るような基礎的な病理組織研究を行っていくべきと考えておりますので，このセッションは重要です。またスライドコンファレンスの性質上，大半が腫瘍の演題に偏ってしまうため，今後は炎症性皮膚疾患の病理学的研究演題が増えてくれることを願っています。

International Session(図3)

このコーナーでは，本邦から4題，韓国から4題，主に若手の演者による発表がなされました。本邦代表のお二人に加え，韓国皮膚病理学会理事長のDong Hoon Shin教授が座長を務められました。韓

国からの演題のレベルも高く，以前韓国皮膚病理学会に招かれてその年次学術大会に参加したときにも感じましたが，日本に追いつけ追い越せという熱気に溢れており，われわれもうかうかしてられないと痛感しました。このセッションのために，抄録集はすべての演題について日本語/英語両方表記にしました。

ですすこでるばそ2017

本学術大会から初めて設けられました。ダーモスコピーと病理組織との所見の対比を中心とした演題を，14題も出していただきました。両者とも同じ形態学という土俵ですので，病理の先生にもすんなり入ることのできる領域です。ダーモスコピーを専門としている先生も多く，病理には詳しくてもダーモスコピーは素人，という参加者にもわかりやすい解説をいただきました。このセッションはユニークですので，今後ますます発展していくものと思います。

皮膚病理道場あどばんすと2017夏の陣

本学術大会の前日6月16日に，浅草橋ヒューリックホールにて恒例のサテライト事業である実習型講習会「皮膚病理道場あどばんすと2017夏の



図3 International Session後の韓国側参加者との記念撮影(最前列は8名の演者)。

陣」を開催しました(図4)。参加費無料です。第1回の講習会は平成25年でしたが、平成28年よりそれまでの年1回から、2回開催に増やしております。日本皮膚科学会との共催事業のため、日本皮膚病理組織学会会員のみならず日本皮膚科学会会員であれば誰でも参加できます。今回は肉芽腫性疾患と悪性黒色腫がテーマでした。若手講師による解説の後、各自バーチャルスライドをみながら実際の標本観察を自己体験しつつ学んでいくため、知識が非常に身につくやすく受講生に好評です。質問に対しても多数のチューターが優しく答えて

くれます。講習会後は、これまたお約束の「今夜は病理ないと2017」がお茶の水で開かれました。要は、全国の皮膚病理愛好家の若者との交流懇親会(参加費無料!)です。参加者は皆、冷たいビールでヒートアップした頭を冷やしていました。

おわりに

本学術大会を終えて感じたことは、若手の力が安定的に発展してきており、かつて私を含め本学会の老齢の域に達した主要メンバーが危惧したような「日本の皮膚病理絶滅論」の懸念は若干薄らい



図4 「皮膚病理道場あどばんすと2017夏の陣」での1コマ。

だような気がします。しかしながら、ここで手綱を緩められません。継続的な知識や技術の伝承は、日本で皮膚病理が生き残っていくために必要不可欠です。本学術大会中に開かれた理事会では、共同研究プロジェクト構想も持ち上がり、テーマをベテランメンバーが提案し、会員の中から協力施設を募り、実際の研究は選抜された若手が行う、というシステムが確立すれば今後の当学会の発展にもつながります。3、4年後の本学術大会でその成果が披露されるようになればたいへん嬉しいです。また、若手会員執筆の英語論文のうちもっとも優れたものを毎年学会で表彰することも承認されました。私が本学会の会長を務めるのも理事長任期満了の平成30年までですが、なんとか最後の

学術大会に間に合います。これからも本学術大会が会員にとって有意義かつ楽しいものになるための提案をしていこうと考えております。また、韓国皮膚病理学会との連携のさらなる発展も図っていきます。

なお、皮膚病理組織学会の事業内容、年次学術大会、「皮膚病理道場あどばんすと」(参加費無料！)についてお知りになりたい方は「jds.umin.jp」までアクセスください。

最後に、本学術運営に関しご協力を賜った関係各位、座長の労をお取りくださった皆様、そして演者としてご活躍くださった皆様に深く感謝申し上げます。